

皮日休「館娃宮懷古」の「香徑」について

——「詩跡」解釋の視點から——

松 尾 幸 忠

館娃宮懷古

皮日休

豔骨已成蘭麝土
宮牆依舊壓層崖
弩臺雨壞逢金鏃
香徑泥銷露玉釵
硯沼只留溪鳥浴
牒廊空信野花埋
姑蘇麋鹿眞閑事
須爲當時一愴懷

豔骨 已に蘭麝の土と成り
宮牆 舊に依つて層崖を壓す
弩臺 雨に壞れて 金鏃に逢ひ
香徑 ……………
硯沼 只だ溪鳥の浴するを畱め
牒廊 空しく野花の埋むるに信す
姑蘇の麋鹿 眞に閑事
須く當時の爲に 一たび懷を愴ましむ
べし

(一) 序

この詩は、晩唐の詩人皮日休が吳越の争いを題材にして詠

皮日休「館娃宮懷古」の「香徑」について（松尾）

んだ、七言律詩體の「懷古詩」である。⁽¹⁾

皮日休は、咸通十年（八六九）、蘇州刺史崔璞の從事として蘇州の地を訪れ、そこで當地に閑居していた陸龜蒙と知り合い、詩を唱和し合った。『松陵集』は、咸通十一年を中心とした一年あまりの間に両者が作りかわした詩を、一方の陸龜蒙が編集し、他方の皮日休が序文を執筆したもので、冒頭に掲げた詩はその卷六に收められている。

吳越の争いは古來から多くの詩人が創作の題材としてきた。この詩も、越王勾踐を會稽山に破り、父の仇を討った吳王夫差が勝利に慢心し、西施を得て遊興に耽り、伍子胥の諫言を聞き入れなかったため、結果的に越に滅ぼされてしまったことを傷んだものである。詩中には「館娃宮」（夫差が西施のために靈岩山に築いた宮殿の名）、「姑蘇」（夫差の父闔

閻が築き、夫差が擴張した壯麗な離宮「姑蘇臺」のこと）を
始めとし、吳越の故事ゆかりの遺蹟が多く詠み込まれてい
る。

小稿ではその中の頷聯に出てくる「香徑」について、資料
的側面と、律詩の對句としての整合性という側面から、従來
の解釋に検討を加え、併せて、唐宋期における「詩跡」（歌
枕）形成の要點について、簡約な言及を試みたい。

(二) 二つの解釋

「香徑」は「採香徑（逕）」とも言い、夫差が西施のために
靈岩（巖）山西南に位置する香山に香草を植え、それを西施
に摘ませたところからその名がおきた。「徑」という字は、
本來「こみち」という意味であるが、「涇（みぞ）」に通じて
使われることがある。（現に資料の一部には「採香涇」に作
るものがある。後出）。そこで「採香徑」を、西施が香草を
摘んだ「こみち」と解釋するものと、香草をとるために開鑿
された「水路」と解釋するものがある。

この詩は主要な選集類では『三體詩』に収録されているの
みで、中國における現代語譯は勿論のこと、邦譯も決して多

くはなく、現在一般に通行しているものとしては村上哲見
『三體詩』二（朝日新聞社、文庫版中國古典選、一九七八年）が舉
げられる。それによれば、該當する頷聯の部分は、訓讀では
「弩臺 雨に壞れて 金鏃に逢い／香徑 泥銷して 玉釵を
露わす」となっており、譯では「兵士に弓を習わせた高臺は
雨のためにくずれて金屬の鏃を見出だし／香草を摘んだ徑
は土を洗い流されて玉の釵があらわれている」（傍點、松尾）
となっている。「香徑」は、ここでは「こみち」と解釋され
ている（これをA説とする）。

一方、比較的最近發行された石川忠久『NHK漢詩をよむ
〜風土と人々（江南の巻）（四月〜九月）』（日本放送出版協會、
一九九四年）には本詩が収録されており、そこでの解釋は、
「香徑」を水路ととり、「香徑 泥に鎖えて 玉釵を露す」と
訓讀し「西施のために開鑿された採香涇は、泥に埋もれて跡
形もなくなり、泥の中から姿を現した髪飾りが、ひとり當時
をもの語る」（内山精也執筆）と譯されているのである（こ
れをB説とする）。

そこでまず、資料的側面から見た場合、いずれの説がより
適切であるかを検討してみた。

(三) 資料に見える「香徑」

「館娃宮」や「姑蘇臺」についてはすでに六朝期の作品にその名が現われるが、「香徑」を始めとするさらに細かい遺蹟の名が作品に詠みこまれるようになるのは唐代、それも盛唐を経て中唐に至る頃からである。⁽⁶⁾ 唐代の地理書で「香徑」の名が確認できるのは、唐の陸廣微撰『吳地記』⁽⁷⁾の佚文である。

吳王遣美人採香於此山、以爲名、故有採香徑。

『太平寰宇記』卷九一所引⁽⁸⁾

吳王種香於此、遣美人採之、故名。下有採香涇、通靈巖山、今名箭涇山。

盧騰龍『蘇州府志』卷六所引⁽⁹⁾

しかし宋代になると、かなり詳細な記述をした文獻が現われてくる。これは、唐代に形成された「詩跡」の觀念が、宋代に至りかなり定着してきた傾向を示すものと思われる(第五章、結語参照)。例えば南宋の范成大の『吳郡志』は次の

皮日休「館娃宮懷古」の「香徑」について(松尾)

ように説明する。

館娃宮、吳越春秋・吳地記皆云：閭闔(闔閭)城西有山、號硯石山。山在吳縣西三十里、上有館娃宮。又方言曰：吳有館娃宮今靈巖寺即其地也。山有琴臺、西施洞、硯池、玩花池、山前有採香徑、皆宮之故跡。

(卷八、古蹟)

採香涇、在香山之傍小溪也。吳王種香於香山、使美人泛舟於溪以採香。今自靈巖山望之、一水直如矢、故俗又名箭涇。

(同)

靈巖山、即古石鼓山、又名硯石山。……山前十里、有採香徑、斜橫如臥箭云。

(卷十五、山)

香山、胥口相直。吳王種香於此山、遣美人採香焉。傍有山溪、名採香涇。事具古蹟門。

(同)

范成大は、また詩や賦のなかにも「香徑」を詠いこんでいる。

香山

採香徑裏木蘭舟	採香	徑裏	木蘭の舟
嚼蕊吹芳爛熳遊	嚼蕊	吹芳	爛熳の遊
落日青山都好在	落日	青山	都 <small>みな</small> 好在
桑間蕎麥滿芳洲	桑間の蕎麥	芳洲に滿つ	

〔范石湖集〕卷三

館娃宮賦

蕩龍舟之水嬉 龍舟の水嬉をはしまま蕩うにし
 擷香徑之春芳 香徑の春芳を擷とむ

(同、卷三四)

この資料によれば、「香徑」とは、吳王夫差が香山に植えた香草を西施に摘ませるために開鑿した水路ということになる。そしてそれは靈岩山から望んだ時に、矢のように眞直ぐ

であった事から「箭涇」とも呼ばれたという。「徑」自体は本来「こみち」の意味であるが、それを積極的に證明する資料に缺ける以上、「涇」に通じる「水路」の意味ととらざるをえないであろう。

(四) 律詩の對句としての整合性から

次に、律詩の對句としての整合性という観点からこの問題を考えてみたい。

律詩は近體詩の中で最も聲律の規則の嚴格なものといわれる。従って、平仄は勿論のこと、領聯、頸聯の對句における語法の嚴格さも重要な要素となる。そこで先の二つの解釋のうち、いずれが對句の語法面から見て、より適切であるかを判断したい。

A説に従えば、領聯は「兵士に弓を習させた高臺は雨のためにくずれて」と「香草を摘んだ徑は土を洗い流されて」となり、「高臺が雨によってくずれる」⇔「徑は土を洗い流される」で、語法的に嚴密な對句とはならない。また、語義のうえから考えても「銷」は「消」に通じ、「消える」の意味はあるが、「流れる」の意味はない。

一方、B説に従えば「吳王自らが兵士に弓を教えたという

臺は、雨に打たれて崩れ去り」と「西施のために開鑿された探香涇は、泥に埋もれて跡形もなくなり」となり、「臺が雨によって崩れ去る」⇨「探香涇が泥によって埋もれる」で、語法的に嚴密に對應する。また、意味の上からも「水路が泥によって埋もれて消える」ととる方がより自然である。

従つて、この解釋は、對句の整合性という點から判斷して、B説に従うのが妥當といえよう。⁽¹⁰⁾

(五) 結語

以上、「館娃宮懷古」に詠われた「香涇」の實態について、文獻資料の側面と、對句としての整合性という側面から検討を加えてきた。そして上述の検討の經緯による限り、B説に従つて解釋するのが明らかに妥當であるとの結論が得られよう。次に試譯を掲げる。

館娃宮にて古を懷う

かの麗しき人西施の骨はすでにかぐわしい土と化して
しまったが、かつての宮殿の塀は今もなお昔のままに、
幾重にも重なった斷崖に臨んでたつ。

皮日休「館娃宮懷古」の「香涇」について(松尾)

むかし、^{おほみ} 駕を据え付けたという高臺は雨に崩れてしまひ、眼に觸れるのは金屬のやじりだけ。そして西施のために開鑿されたという探香涇は土砂に埋もれて消え、玉のかんざしが現われているのみ。

山頂の硯池には、今は溪にすむ鳥が水浴びをしているばかりで、西施が歩いた響屧廊も、空しく野の花に埋もれたまま。

伍子胥が、姑蘇臺がいずれ麋鹿の遊ぶところとなるのを恐れて吳王に諫言したことも、本當に無駄なこととなつてしまった。今となつては、往時の榮華を偲んで、ひとたびは悲しもうではないか。

詩歌史的・文學史的に通觀した場合、「館娃宮」も「香涇」も、吳越の興亡を素材とした典型的な「詩跡」であるとして位置づけられよう。この場合、特に大事な點は、それが大量かつ系統的に詠われるようになるのが、唐代、特に中唐以後の趨勢だという點である。

一般に、「詩跡」(歌枕)が形成されるに當つては、①名勝舊跡の存在に加えて、②それを詠い込んだ著名な文學作品の存在とが、必要不可欠とされる。唐代三百年は甚だ「詩跡」

の増加した時代であったが、特に盛唐を経て中唐以降に至ると、「香徑」の作例にも明らかのように（注6参照）、この現象はより顯著になる。それは一つには、長く南北に分裂していた中國が唐という強力な王朝により統一され、國內の移動が容易になったことに加え、この時期、多くの詩人や文人官僚が旅行或は左遷等により、國內各地（特に長江以南）をめぐる機會が増えたことなどによるものであろう。こうして形成された詩人と土地との結びつきは極めて多い。李白と宣城、柳宗元と永州、杜牧と揚州等々……。勿論、唐以前においても、文學者が各地方を訪れる機會はあったに違いないが、國全體の政治（官僚）機構の整備や作詩人口の多さという點では遙かに唐に及ばず、そのため「詩跡」の形成という點でもあまり大きな成果を生み出さなかつたのであろう。

では、彼らのような「旅人」は、なぜ「詩跡」の形成に大きな役割を果たしたのであろうか。それは、直接には、彼らが残した名作の中に、その土地の名勝舊跡が多く詠み込まれていたからに他ならない。では、なぜ彼らはそのように名勝舊跡を作品中に詠み込んだのであろうか。それは彼らが他郷の人間としてその土地を訪問したため、その景物を相對化して觀ることが出來たからである。

對象としての景物は、それが相對化されて作品中に詠み込まれたとき、初めて新鮮な感動を伴って讀者に迫ってくる。その創作のきっかけが、純粹に風景美に對する感動であつたにせよ、或は左遷の悲哀を慰めるよすがであつたにせよ、或はまたその土地ゆかりの歴史上の人物に對する深い共感であつたにせよ。そうして作品中に詠まれた名勝舊跡は、作品の著名度と相俟って強く讀者の腦裏に焼きつけられることになる。特に唐代は詩の時代であつたから、詩に詠み込まれた土地は後世の人々への印象付けに大きく作用したのであろうことは想像に難くない。

そしてこの影響は宋代に入ると強く表れてくる。唐代に開拓された様々な「詩跡」は、宋代の詩人たちによって詠みつがれ、「詩跡」としての體裁を一層整え始める。それは、原來的に言えば、特定の風土・景物が、特定の詩歌との關わりにおいて認識されるという「認識の型」の成立に他ならない。しかしまた一面、より現實的に言えば、當該地域に關する文學的な「觀光」の對象として、意識され始めるということでもある。

廣く讀まれた范成大の『吳郡志』（五十卷）なども、そのような時代背景の影響を受けていると見ることができよう。

さらに『方輿勝覽』(七十卷)のような書物の出現に至っては、まさにこの時代のこうした傾向をより明確に現わしたものとしてみとらえることが出来るはずである。

「詩跡」の形成とその詩的表現効果の問題については、日本文學における「歌枕」「俳枕」との比較を含め、今後の中國古典詩研究において、多くの論點が提供されうるものと考えられる。

〔注〕

(1) この他にも皮日休には「館娃宮懷古五絶」(卷七)と題する作品が存在する。なお、いずれの作にも陸龜蒙の唱和した作品がある。

(2) 越王勾踐が夫差に献上した美人が西施であったという傳承は、もともと『呉越春秋』や『越絶書』等に見られるもので、『史記』を始めとする正史類には記されていない。

(3) 『釋名』(卷一) 釋水に「水直波曰涇、涇、徑也。言如道徑也」とある。『爾雅』 釋水にも「直波爲涇」とある。また『經典釋文』(卷二七、莊子音義中、秋水第十七)に「涇流、音經、司馬云、涇、通也。崔本作徑、云、直度曰徑、又云：字或作涇」とある。

(4) 本テキストには執筆者名が明記されていない。これは擔當者からの直話による。

皮日休「館娃宮懷古」の「香徑」について(松尾)

(5) 例えば左思「吳都賦」に「辛乎館娃之宮、張女樂而娛群臣」とあり、また謝朓「和王著作融八公山」詩に「再遠館娃宮、兩去河陽谷」とある。

(6) 例えば、「香徑」を詠み込んだ作品には、次のようなものがある。

吳城覽古

陳羽

吳王舊國水煙空

香徑無人蘭葉紅

春色似憐歌舞地

年年先發館娃宮

館娃宮在舊郡西南硯石山、前瞰姑蘇臺、旁有采香徑、梁天監中置佛寺曰靈岳、即故宮也。信爲絕境、因賦二章

(其一)

劉禹錫

月殿移椒壁

天花代舜華

唯餘采香徑

一帶繞山斜

題靈巖寺

寺即吳館娃宮、鳴屨廊、硯池、採香徑遺跡在焉。

白居易

娃宮屨廊尋已傾

硯池香徑又欲平

二三月時但草綠

幾百年來空月明

使君雖老頗多思

攜觴領妓處處行

今愁古恨入絲竹

一曲涼州無限情

直自當時到今日

中間歌吹更無聲

中國詩文論叢 第十五集

なお、注(1)で指摘した他に、陸龜蒙にも「香徑」を詠み込んだ作があるので参考までに掲げる。

吳宮懷古

陸龜蒙

香逕長洲盡棘叢

奢雲豔雨祇悲風

吳王事事須亡國

未必西施勝六宮

(7) ここでは江蘇古籍出版社、一九八六年版に據った。

(8) 文海出版社版『太平寰宇記』同卷にはこの文無し。

(9) 『同治蘇州府志』(清、李銘皖・譚鈞培修、馮桂芬纂) 卷六、山の項も記述同じ。

(10) 今日の蘇州における観光案内的な書物では、「香徑」を「水路」ととらえているのが一般的傾向のようである。例えば『吳中勝覽』(朝花美術出版社、發行年不明)、『葶蘿西施志』(杭州大學出版社、一九九一年)など。なお、この二つの資料については、横濱市立大學内山精也氏の御教示を得た。